０３　光源氏への時代ごとの評価と時代的背景

The evaluation and historical background of Hikaru Genji of each era (from commentaries of GENJIMONOGATARI)

要旨　紫式部作、世界最古の長編小説で知られる「源氏物語」に登場する「光源氏」への評価を、「源氏物語」の注釈書や資料集などの書物から読み解く。そして、中世、近世、近代、現代の４つの時代区分ごとの共通する評価を見つけ出し、その評価の要因を時代背景から考察する。

Abstract　Analyze the evaluations of Hikaru Genji, a character from The Tale of Genji-the world's oldest full-length novel written by Murasaki Shikibu-by examining annotated commentaries and reference texts related to the work. Then, identify the evaluations that are common across four historical periods: the medieval, early modern, modern, and contemporary eras, and consider the reasons for these evaluations considering the historical context.

～　源氏物語の注釈書から導く～

１　研究背景と研究目的・意義

1.1　研究背景

高等教育の古典探究で学習する源氏物語では本文・注釈・源氏物語図解の写真やあらすじ、登場人物の記載のみが記載されている。高等教育で学習する内容以上により深い知見を得て、様々な注釈書から時代ごとの源氏物語の変遷を読み取り、そのなかにある普遍的解釈を見つけることで学習する古典探究をより追及していきたいと思い、この研究に取り組むことにした。

1.2　リサーチクエスチョンと先行研究・事例

先行研究は、源氏物語に登場する人物の言動への評価を作家や研究者が著書に書き記すものが多くあるが、私たちが目的としている、光源氏への普遍的、共通する評価をまとめる研究はない。また、私たちは源氏物語が中世から現代に至るまで読み継がれてきた要因として、中世から現代に至るまでに共通する常識や価値観があるのではと考えた。そこで私たちは源氏物語に登場する光源氏に焦点を当て、光源氏に対する評価から共通の常識や価値観を見出そうと研究に取り組んだ。

1.3　研究の目的・意義

様々な時代・著者の注釈書を読み、そこから得られた知識から、光源氏に対する時代ごとの評価や時代的背景を探り、現在までの変化を明らかにする。またこの研究を通して、日本人の昔から通じる性質・考え方を見出すことで、内容の理解だけに留まらず様々な時代・人と現代を生きる私たちとの違いが考察でき、古典知識を深めることで、この物語をより楽しむことができる。そして源氏物語に留まらず、様々な古典文学への興味・関心につなげることができれば、さらなる日本文学の発展につながることを期待する。

２　研究方法１　　注釈書や解説書を読んで考察する

2.1　研究１　注釈書から光源氏の中世から現代にいたるまでの普遍的な解釈が読み取れる。

私たちはまずリサーチクエスチョンとして光源氏に対する評価にはこの物語が作られ、読まれた中世から現代に至るまでに共通するものがあるとして研究を進めた。

2.2　研究と分析方法

源氏物語の注釈書、資料より光源氏の人物に対する評価の記述を探す。そして、中世から現代における共通する評価を見つけ、普遍的な解釈とする。

2.3　結果

「「さらでも、とおぼゆるふしぶし、おおくぞはべり」＜こんな風にしなくても、と感じられる所が沢山あります。＞と述べられている。」(藤原俊成女)『無名草子』からは中世期初頭の段階において光源氏は「理想の男」とは言えないということが分かる。また、『河海抄』など中世以来の注釈書では、「複合のモデルの事跡を合成して造られた人物」として理解される。例えば、桐壺帝や実存の醍醐帝をそのままなぞった存在と解釈することがある。このことから光源氏はとりわけ複合的、多面的な人物であると見られていたことが分かる。さらに、「読み手(聞き手)は次々と具体的なイメージを膨らませることになるが、それだけかえって光源氏という統一的な人間像としては、世の中のどこにも見出し難い巨大な存在になろうとする。」「彼は魅力の権化として物語世界を生きるのである。」(鈴木日出男)『日本文学講座４　物語・小説－Ⅰ』という見方があった。また、「中世の物語の特徴として『勧善懲悪』による道徳的価値から人物を理想化している。(略)しかし、源氏物語では、善の代わりに美的・感情的な面において人物を理想化している。そのため、道徳的な過ちを犯す場面も描かれている。」(加藤周一)『日本文学史序説　上』ということから、美男で優れた芸術性をもつ魅力的な男ではあったものの、道徳的に理想の男とは言えなかったと言える。また、近代においては、「評判だけはよく、ただ好色事が多く軽しい人間だと思われているが、本当は人目を避けながらも真面目で控えめな性格で異性の心をそそるような魅力があったというような話はない。」(谷崎潤一郎)『新々訳　源氏物語』、「光源氏と世上の人はあだ名をつけ浮ついた色好みの公達ともてはやすが、彼は真実のところまめやかで真面目な心持ちの青年である。」(田辺聖子)『新　源氏物語(上)』や「光源氏は自然奔放な好色生活が想像されるが実際は、もっと質素な心持ちの青年であった。」(与謝野晶子)『源氏物語(上)』これらの近代の文豪たちによる源氏物語の訳からは現代を生きる私たちと同じように、光源氏＝女好き、好色男などといった印象を持っている。

2.4　考察

中世から現代における光源氏への共通する評価は、「理想的な男ではない」「現実に存在しがたい」の２つが挙げられる。しかしこれは結論としては少々強引なものとなり、これ以上の光源氏への普遍的な評価の考察は不可能であると考えた。その原因として考えられることは、光源氏への普遍的な解釈を導くには時代の範囲が広く、中世から現代の間では文化や価値観、常識が全く異なっているということである。そのため、普遍的な解釈を見出すことが困難だと考察する。

3.1　研究２　時代ごとに分けられた光源氏に対する評価の変化は社会的背景が関係している

研究１で、中世から現代にいたるまでの光源氏に対する類似した評価は見つかったが、全く同じではないと結論付けた。理由としては 2.4 考察で示した通り、中世から現代にいたるまでに文化や価値観、常識が全く異なっていることがあげられる。そこで次に私たちは、光源氏に対する評価が変化しているのは当時の社会的背景が関係しているのではないかというリサーチクエスチョンの下で研究を進めた。

3.2　研究方法と分析方法

引き続き源氏物語の注釈書、資料より光源氏の人物に対する評価の記述を探す。そして、中世(鎌倉(1185)～室町（1573))、近世（安土桃山（1573）～江戸（1868）)、近代（明治～第二次世界大戦前)、現代（第二次世界大戦後～）で４区分をし、これら４つの時代ごとの評価を並べ、そのように考えられた要因となる社会的背景を見つける。

3.3 結果

中世では、「無名草子」(藤原俊成女)、「河海抄」「花鳥余情」(四辻善成)、「源氏釈」(隆円）の３つの

注釈書を分析した。無名草子では、光源氏の行動に対して「こんな風にしなくても、と感じられる所がたくさんある」とし、河海抄では複数のモデルの事跡を合成して造られた人物として理解するという記述がある。また、隆円は光源氏のこと「五欲に迷った凡夫」、彼の恋愛遍歴に対して、「業による報い」、彼の出世・栄華のシーンについては、「これは仮の栄華似すぎず、無常の証」として扱った。また、四辻善成は光源氏を道徳的な欠点を持ちつつも、哀れで人間的な存在として描写され、晩年の孤独に着目して、「愛執に囚われた者の悲哀」と表現した。中世全体を通して、光源氏を哀れみの対象としたり、現実では受け入れられないような人物であると、現実的な観点からあまり好印象を抱いていなかったりしていることが見受けられる。これは当時、仏教が盛んに信仰されていたことで、栄華はいつか終わりが来るもので儚いという認識や、苦しみの原因である「煩悩」は払うべきなどといった仏教的価値観が広まっているため、光源氏に対し無常や煩悩に翻弄される哀れな人物という認識がなされたと考察できる。また、「源氏物語」の成立とこれらの評価がされた時期が近く、この物語を現実世界と照らし合わせて読みやすいため、現実的な評価につながったと考える。

近世では、「源氏物語玉の小櫛」(本居宣長)より、本居宣長は光源氏を紫式部の本意であるとし、世の中のすべての良いことを具現化した存在であるとした。光源氏が物語の中でたくさんの女性と関係をもつことに対し、儒教的観点からみれば不義悪行であり、これをおかした者はどれだけの良いことをした者であったとしても、良い人とは言えなかった。しかし、源氏物語は儒教的書物ではないため儒教の善悪で評価をすることは間違っているとした。これは本居宣長が生きた江戸中期、日本古来の考え方を追求する国学が発展したことで、これまで儒教的な視点から読まれ、教本的な立場で読まれた源氏物語が、物語として読まれるようになった。また国学には儒教・仏教へ反発もあり、こういった思想が発展したことが光源氏に対し、儒教的に立派な人物ではないものの、良き人の模範であるという評価が成されたと考察される。

近代では、「新新訳源氏物語」(谷崎潤一郎)、「源氏物語(上)」(与謝野晶子)の 2 つの注釈書より谷崎潤一郎と与謝野晶子は光源氏を好色男のように思えるが、実際は地味で真面目な青年であったと訳している。これは、2 人が生きた時代は世界との戦争の最中で尊王思想が特に強かったことから皇族の不義の行為による好色男というマイナスなイメージをなくすため、このように訳されたと考えられる。実際、谷崎潤一郎の源氏物語では皇族や天皇を中心とした描写から不敬箇所を削除して刊行された本もあった。

現代では、「源氏物語作中人物事典」(西沢正史)、「日本文学講座４物語・小説―Ｉ」(鈴木日出男)、「図説日本の古典７源氏物語」(秋山光和他８名)、「源氏物語の物語論」(阿部秋生)の 4 つの現代の著書にはさまざまな光源氏への評価が見られた。超越性があり、世の中のどこにも見出しがたいとする記述や、一つ一つの恋に純粋に生きている、魅力の権化であるといった高評価、禍々しさを感じる、色好みであるなど、様々な角度からの評価を集めることができた。これは戦後、日本国憲法の公布による言論、思想の自由、尊王意識が和らいだことにより、自由な意見を持つことができるような社会になったためであると考えられる。また、今までの固定概念を見直す動きが見られはじめたことや、様々な文化に触れる機会が増加したため、柔軟かつ広い視点で物語を捉えられるようになったからであると考察する。

3.4　考察

研究 2 の結果から、中世では仏教思想により光源氏の評価としては欲にまみれた、世俗的な人間であるとして批判的なものが多く、近世では、儒学や仏教に反発する思想として国学が発展したことにより、作者紫式部の描く光源氏という人物に対して、肯定的な評価であった。近代では戦時中における全体主義や天皇崇拝が強要され、文献では天皇の血を引く者として光源氏の評価は肯定的なものであった。
また現代では戦後、思想や言論の制限がなくなったことから、肯定や否定だけでなく光源氏の人物像をたくさんの視点から分析するなど、多種多様な評価であった。このことから、光源氏に対する評価の変化には社会的背景が関連しているといえるだろう。光源氏に対する評価が同じであっても光源氏を評価するにいたる思想がそれぞれの時代で異なっているため、平安から現代までに共通する評価が見受けられないことにも納得がいく。

４　結論と今後の展望

4.1　結論

研究１から得られた結果をもとに研究２を進め得られた結果として、中世以外の時代区分では共通する光源氏に対する評価は得ることができなかったが、源氏物語に登場する光源氏に対する評価の変化には当時の社会背景が関連していると結論づけられる。世界最古の長編小説とされるこの物語が現代までに愛される作品に至るには様々な時代の価値観、常識に適応し続ける作品を作った紫式部の見事な手腕によるものである。ただ、研究資料が少なく、また時代ごとの常識や価値観を知るためには源氏物語以外の物語や文学作品からも読み取り、照らし合わせることでより正確な考察をするために、追加で研究を行う必要がある。

4.2　今後の展望

今回の研究は本校の図書館にある書籍を用いて進めてきたが、書籍の数には限りがあり、私たちの結論が正しいと言い切るには不十分な研究量であったため、校外にある地域の図書館や歴史資料館などさらなる研究資料が得られる場所に訪れ、研究資料の数を増やし結論の信憑性を高めていきたい。

５　引用文献・参考文献

西沢正史(2007)『源氏物語　作中人物事典』東京堂出版

鈴木日出男　(1987)『日本文学講座４　物語・小説－Ⅰ』日本文学協会 大修館書店

加藤周一(1979)『日本文学史序説　上』筑摩書房

谷崎潤一郎(1973)『新々訳　源氏物語』中公文庫

田辺聖子(1984)『新　源氏物語(上)』　新潮文庫

與謝野晶子(1971)『源氏物語(上)』　　角川文庫

秋山光和他８名(1978)『図説　日本の古典７　源氏物語』. 集英社

阿部秋生(1985)『源氏物語の物語論』.岩波書店.

中村幸彦(1978)『近世文学論集』p91『源氏物語玉の小櫛－本居宣長』岩波書店

藤原俊成女（1367 ごろ)『無名草子』

四辻善成（1367 ごろ)『河海抄』

四辻善成（1472)『花鳥余情』OpenAI. (2025). ChatGPT (Junell version) [Large language model]. [1](https://chat.openai.com)